

第八回 西樂寺講座

たかひらさんぽ 旅のしおり



「たかひらさんぽ」出発点 春岡神社と本庄山砦

西楽寺講座第八回はお散歩企画「たかひらさんぽ」です。春岡神社を出発して、西楽寺一山のひとつ、高平山遍照寺（森町飯田）を目指します。

出発点となる春岡神社は、明治二十三年（一八九〇）に、西楽寺鎮守の十所権現（明治の神仏分離政策で、明治には仏教色のある「権現」という名称を避け「十所神社」という名称になりました）と、春日神社が合祀されて生まれた神社です。

春日神社に関する古い時期の史料は、西楽寺文書『当山諸由緒扣』に収録されている宝永六年（一七〇九）四月付け「乍恐以口上書奉願候」（西楽寺文書

近世一一／参考文献④一九号）です。

『当山諸由緒扣』は、虫損などで状態が悪くなった古文書を、保存のために書き写した帳面で、幕末頃にできました。収録文書には誤写もありますが、割と誠実に書き写しているようです（参考文献③）。

宝永六年四月付け「乍恐以口上書奉願候」は、神職の権利に関する訴訟文書です。

読んでみると、春日神社は大同年間以来のもので、代々村松氏が神職を務めてきた。上山梨村を襲った「貞享二年大火」の時、秋葉山へ、火難を逃れるように祈ったところ、火難を逃れたので、お礼として祭礼を執り行ったところ、「不届き」とされて追放処分となってしまう。この度、追放が許されたので、神職を返してほしい、という内容です。

貞享二年大火に関する史料であると同時に、秋葉祭の始まりに関する史料でもあります。

秋葉祭の始まりに関する言説については、『袋井市史 通史編』で本多隆成氏も触れています。本多氏は「もとよりこれは風説にすぎないであろう」（参考文献①七〇七頁）としていますが、宝永六年四月付け「乍恐以口上書奉願候」の内容は、秋葉祭の始まりに関する伝説を、単なる風説から、歴史的な事件へと変えるものでもあります。

ところで、春日神社があった場所（春岡神社がある場所）には、かつて「本庄山砦」という砦があったそうです。本庄山砦は、地元武将である村松氏の居城とされています。



本庄山砦（春岡遺跡群）遠景

北と西側は太田川、南側と西側には湿地の谷がある天然の要害です。

城の北尾根筋に大堀切があり、本曲輪の西側には戦国時代の横堀が

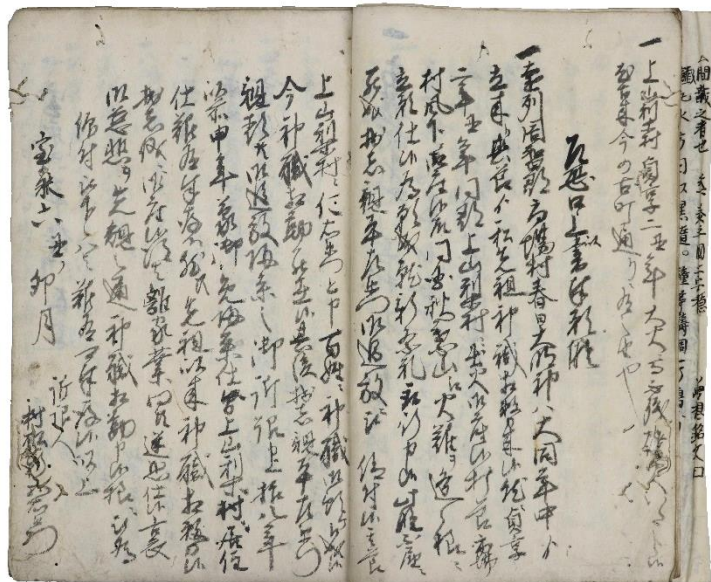
めぐらされています。戦国時代末期に、村松氏の居城を、徳川氏か武田氏が改修したものではないかとされています。

発掘調査で南側の横堀も発見されました。堀の底を通路として利用していた、と考えられています。

……と、参考文献②を参考に本庄山砦を紹介しましたが、本庄山砦については、江戸時代末の文献『村松氏本系帳草案』（西尾市岩瀬文庫所蔵）に「本城山寨」、「本庄山」とあるくらいしか文献が見つからないので（参考文献②）、文献的には謎の遺跡と言えるでしょう。

明治の役場文書を読んでもみると、春日神社の棟札に「本庄山」の文言があるようです。

棟札 奉造宮春日社 村松源右エ門秀茂



『当山諸由緒扣』所引「乍恐以口上書奉願候」

(一六六八)
寛文五乙巳年秋八月十日重珍本庄山

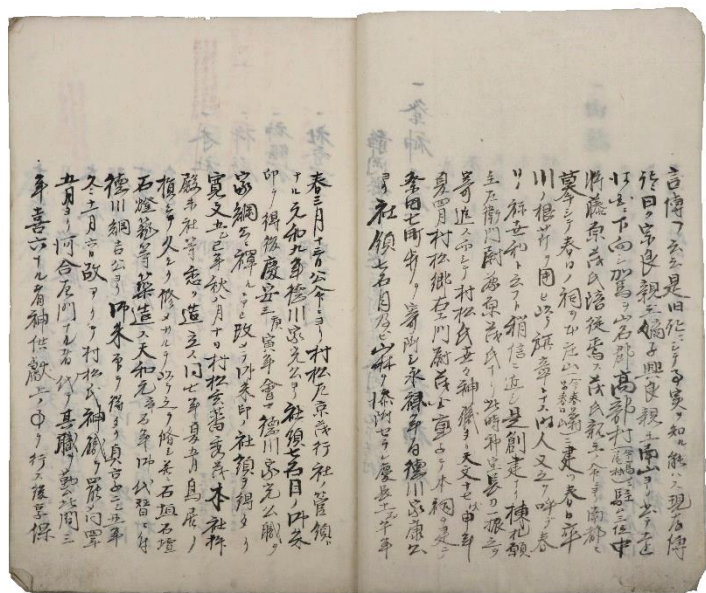
大工棟梁

鈴木角右工門

(参考文献④一三二号、二七四頁)

この棟札は、寛文五年(一六六八)八月十日に、村松玄蕃秀茂が本社・拝殿・末社を造立したときのものです『春日(春岡)神社明細帳』参考文献④一四一号、三〇四頁)。その『春日(春岡)神社明細帳』に書かれた神社の由緒には以下のようにあります。

(前略)是旧記ニシテ、事実ヲ知ル能ハス。現存伝記ニ曰ク、宗良親王嫡子興良親王南山ヨリ出テ遠江国ニ下向シ、駕ヲ山名郡高部村(今高尾村)ニ駐ム。三位中将藤原茂氏陪從焉。茂氏陪從焉。



『春日(春岡)神社明細帳』「由緒」

茂氏親王ノ命ニヨリ南都ニ暮シテ、春日ノ祠ヲ本庄山(今春岡村宇春日山)ニ建ツ。春日卒川ノ根芹ヲ用ヒ、以テ旗章トナス。時人又之ヲ呼デ春日ノ祚世利ト云フト。稍信ニ近シ。是創建ナリ。(後略)

(参考文献④一四一号、三〇三頁)

現存する伝記は古い書き物だからよく分からないが、宗良親王嫡子興良親王が遠江国に下向した際、三位中将藤原茂氏が親王の命をうけて春日の祠を本庄山(今は春岡村の春日山、との由)に建てたのが春日神社の創建だ、と言っています。

「是旧記ニシテ、事実ヲ知ル能ハス」と言いながら「稍信ニ近シ」(けっこう信じられると思う)と言っているところがかわいいですね。

「たかひらさんぼ」では、本庄山砦南く東の横堀を通じて、高平山に続く山道に入ります。

発掘調査では、南側の堀の底で、四角形の穴(柱の跡)がいくつか見つかっています。これらの穴は、



本庄山砦 門の痕跡か

門の柱の跡、橋脚の痕跡などと言われている。ところで、明治二十八年(一八九五)八月三十一日に、春岡神社は火災で焼失してしまいました。

翌年には再建されましたが、火災の原因に関する調査には以下にあります。

(前略)当神社ハ古来ヨリ例トシテ毎月拾四日及月末ニハ必ス神殿ニ燈火ヲ点スルヲ以テ、即チ八月三十一日午後七時三十分頃、例日ノ通り燈火ヲ点シ、終リテ凡ソ一時三十ヲ経過シタルト覺ヘシ頃、右出火ニ及ヒシヲ以テ見レバ、出火ノ原因確ト不ニ相分一候ヘ共、其燈明木製紙張ナルガ為メ燈火ノ火過テ紙ニ焼付キ、之レガ原因ヲナセルモノナランカト相考候(後略)

(参考文献④一三四号、二七七頁)

出火の原因は確かには分からないが、春日神社は古来から毎月十四日と月末には必ず神殿に燈火を点じており、その燈明は木製紙張なので、そこに火がついたのではないかと、このことです。

皆様も、くれぐれも火の元にはご注意ください。

【参考文献】

- ①本多隆成「庶民信仰と地方寺院」(袋井市史編纂委員会編『袋井市史 通史編』、袋井市役所、一九八三年)。
- ②袋井市教育委員会編『袋井市春岡土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書 春岡遺跡群 ―遺構編―』(二〇〇三年)。
- ③杉山侑暉「江戸時代における災害復興と災害情報伝達 ―北原川村(現袋井市国本)と西楽寺(袋井市春岡)の元禄地震・宝永地震―」(『静岡県博物館協会研究紀要』第四八号、二〇二五年)。
- ④杉山侑暉編著『宇刈・春岡 神社関係史料集』(袋井市歴史文化館、二〇二六年)。※WEB版のみ。
<http://fukuroi-rekishu.com/siryo/202601/post-330.html>

高平山遍照寺 成立の頃

高平山遍照寺の成立について記す、管見の限りで

最も古い史料は、延宝六年（一六七八）二月十一日付け「高平山遍照寺由緒」（西楽寺文書近世六）です。

中泉代官の手代に提出した文書の案文（手元扣）

と、その案文を更に筆写したらしき文書の二点が残されています。包紙には「高平境内御検地■ 中泉御代官松平市右衛門殿／御奉行江差上写 御手代浅井十左衛門殿」と書かれています。案文の方を引用します。

（端裏書）

「高平山書付」

高平山遍照寺由緒

〔六五〕元和元年乙卯歳木食秀海上人從二高野山一弘法大

師之木像守下シ、山梨子ニ罷在大師堂ニ相立申度

望ニ而、高平山之芝間を、飯田村寿徳を始、其外

村中江所望仕候所ニ、平芝間ニ罷在候。殊ニ大師

堂建立事ニ候間尤之由、何茂談合ニ候。其比飯田

村青山大藏殿御領地ニ罷成候ニ付、右之段大藏殿

へ申達候所ニ相違無ニ御座ニ候故、木食高平建立仕

大師堂相立申、六拾年余ニ罷成候。大藏殿御取替

以後御代官高宝金兵衛殿、松平清左衛門殿御父

子三代右之通ニ被ニ成置ニ被ニ下候。木食〔六四三〕

前ニ死亡仕候刻、後生西楽寺へ頼申候ニ付、木食

建立之大師堂高平山西楽寺へ致ニ寄進ニ候。從レ其

西楽寺当代迄四代支配仕、号奥院と罷有候。右

之通ニ御座候間、可レ然様ニ被ニ仰付ニ可レ被ニ下候。

委細飯田村庄屋衆被レ存候。以上。

〔六七八〕延宝六年

宇剱郷

午ノ二月十一日

西楽寺判

浅井拾左衛門殿

内容をまとめると以下ようになります。

①元和元年（一六一五）、木食秀海が高野山から

弘法大師の木像を守つて山梨（原文では「山

梨子」と書いてあるが、こう書いて「ヤマナ

シ」と読ませたのだらう）にやってきた。

②木食秀海は、「大師堂を建てたい」と言い、高

平山の芝間に建てたい、と飯田村の寿徳をはじめとした、村中へ所望。

③平芝間であり、大師堂を建立しても良いのでは、と、談合（話し合い／現代語のように後

る暗い雰囲気は無い）で決定した。

④その頃の飯田村は青山大藏の領地だったので、

木食秀海が高平山に大師堂を建立したいと言

つており、地元でも好感触であることを、青

山大藏へ申達した。

⑤青山大藏から「相違ない」（申請したとおりで

良い、ということか）と返事があつた。

⑥木食秀海は大師堂を建立した。それから六十

年余りになる。

⑦青山大藏から領主が替わつた後は、代官高宝

金兵衛、松平清左衛門父子三代が領主。

⑧木食秀海は三十六年前（寛永二十年＝一六四

三）に亡くなった。死亡時に遺言で、高平山

遍照寺のことは西楽寺へ任せたいと言つたの

で、木食秀海が建立した大師堂と高平山を西

楽寺（当時の住職は四世龍義／注）へ寄進。

西楽寺当代まで四代支配。「奥院」と名付けた。

この文書は木食秀海が亡くなってから三十年以上

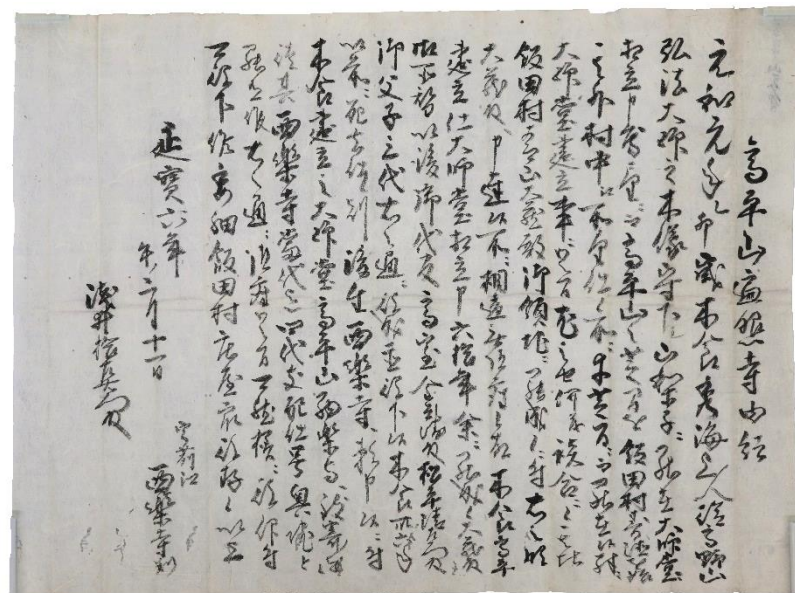
が経過してからの成立ですが、まだ生前の木食秀海

のことを知っている人が生存している年代であり、

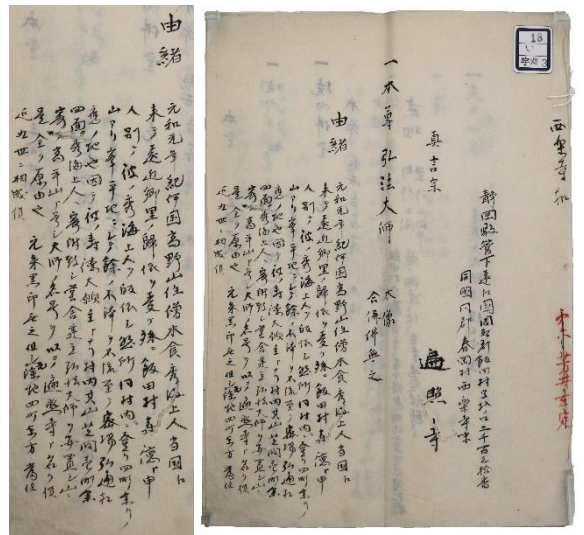
また、中泉代官に出された（実際には代官の手代に

出された）公文書ですから、そう間違つたことは書

いていないでしょう。この史料は、高平山遍照寺を



「高平山遍照寺由緒」（西楽寺文書近世6）



〔西樂寺末寺遍照寺由緒等明細〕

左は「由緒」拡大

西樂寺一山に加えた後に寺社奉行に報告した際、「新たに加わった『高平山遍照寺』とはどのような寺院か」と調査があり、それに際して作成されたものと考えられます。

なお、「高平山」という名称について、これは、「高平山」という山名が元々あって、そこに大師堂を建てたために、そのまま山の名前を山号に使用したことによるようです。

明治十三年（一八八〇）八月「西樂寺末寺遍照寺由緒等明細」（西樂寺文書近世一八）の「由緒」には以下のように書かれています。

由緒

元和元年紀伊国高野山住僧木食秀海上人、当国江来テ遠近郷里ノ帰依ヲ受ケ、殊ニ飯田村寿徳ト中人別テ彼ノ秀海上人ヲ帰依シ、然所同村内ニ登リ、四町余リノ山アリ、峯平地ニシテ余ノ不浄ヲ不レ流、

至テ密場弘通相応ノ地也。因テ彼ノ寿徳大願主トナリ、村内其山芝間壹町余四面秀海上人へ寄附致シ、堂舎建立、弘法大師ヲ安置シ、山ニ寄■高平山ト号シ、大師ノ名号ヲ以テ遍照寺ト名ケ、彼是全ク原由也。元来黒印無レ之。但シ除地四町余。方当住迄九世三相成候。

明治十三年の「由緒」では、木食秀海は、遠近郷里の帰依を受けており、飯田村の寿徳の側から大師堂建立を木食秀海に願った、と書かれています。先の「高平山遍照寺由緒」（西樂寺文書近世六）の方が古く、秀海存命時に近いため、信憑性が高いです。

明治十三年の由緒は、高平山遍照寺にとつて都合が良いように話を改変している可能性があります。山ニ寄■高平山ト号シ、大師ノ名号ヲ以テ遍照寺ト名ケ（山の名によって「高平山」と号し、弘法大師の名号によって「遍照寺」と名付けた）という部分は、寺の歴史に箔をつける内容ではなく、「高平山遍照寺由緒」の「高平山之芝間を、飯田村寿徳を始、其外村中江所望仕候」（高平山の芝間を、大師堂建立の希望地として）飯田村寿徳をはじめとして、そのほか村中へ所望した」という、元々あった「高平山」という山の土地を所望した、という記述とも合致するため、明確な反証が見つかるまでは信じて良いように思います。

さて、この大師堂ですが、年月日不明、西樂寺八葉住職尊昭筆（高平山縁起下書）（西樂寺文書近世二三）には以下のようにあり、浜松から古家をもらつて建てたようです。

蓋し聞、夫当山ハ木食秀海上人之開基なり。上人生国は紀州。則高野山に出家し、元和元年当山弘法大師御影を負ひ、錫を飛し、当国に来て遠近郷里之帰依を蒙り、殊に飯田・三沢の呂寿徳・寿泉兩人ハ大願主となり、此山を附属し、此峯を栖とす。大師堂は浜松五村之古屋一字を上人に帰附し而、を安置し奉る。山号を高平山となづけ、寺号を遍照寺と名づく。是より繁栄すといへり。上人遷化之寛永二十年壬午後、数十年を経て西樂寺之住有香法印遍照寺に閑居し、貴賤の僧俗・弟子等麓を挙ケ峯に分け、登事日々に絶へずとなり、香法印遠紀之星霜捍移て壞乱極ぬ。（後略）

原文は推敲の痕が激しく、そのままの文字組にするととても読めたものではないため、推敲の結果を反映した文に直して引用しました。

この史料には「大師堂は浜松五村之古屋一字を上人に帰附し而」大師像を安置した、とあり、浜松五村から古家一字の寄付を受けたことが分かります。

「高平山縁起下書」は、十八世紀初頭に活躍した西樂寺住職尊昭の筆によるもの（本文中で木食直心を弟子だと言っているため、筆者は直心の師である尊昭だと特定できる）です。後世の史料という点に不安がありますが、西樂寺文書中の、木食秀海の御悔みの一次史料（寛永二十一年（一六四四）五月、六月「高平山 木食旦帳」西樂寺文書近世一六五一）によると、木食秀海は浜松と縁が深かったことが分かりますから、この尊昭の記述にも、一定の信憑性があるのではないかと考えられます。

「当山開山木食秀海上人
同 中興開山法印宥香」

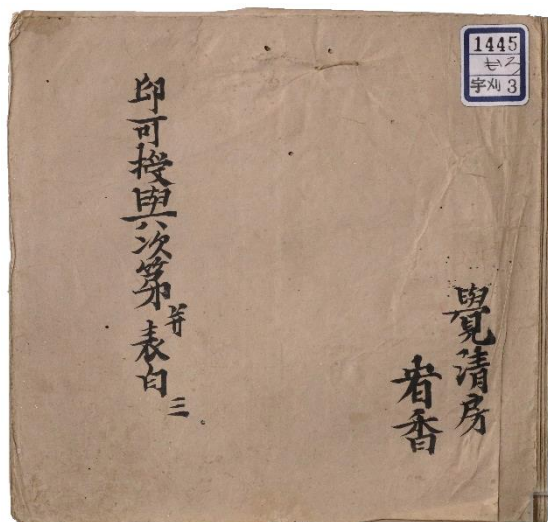


高平山大仏蓮弁（正面上段）

時期や宛先を考えると、先に見た延宝六年（一六七八）二月十一日付け「高平山遍照寺由緒」（西楽寺文書近世六）は、この検地に際して、中泉代官から、遍照寺の由緒（来歴）をまとめて提出するように命じられたものと推測されます。

さて、先ほどから名前が登場している西楽寺五世住職である覚清坊宥香（一六〇七〜一六八四）は、高平山遍照寺の「中興開山」と呼ばれた人物です。

高平山大仏蓮弁銘文には、「当山開山木食秀海上人／同（高平山／引用者注）中興開山法印宥香」と刻まれています（正面上段）。



『印可授与次第并表白三』表紙
（西楽寺文書近世 1445）

宥香が慶安二年（一六四九）四月に筆写した『印可授与次第并表白三』（西楽寺文書近世一四四五）には「覚清房宥香」と署名があり、彼の名前の全体が分かります。『印可授与次第并表白三』の筆写は、宥香の印可に関わるもので、この翌月、慶安二年五月に印信が授与されています。その「宥香印信」（西楽寺文書近世七三五）を見てみましょう。

法印権大僧都宥香

授二印可一

金剛界 大率都婆印 普賢一字明

歸命（バン）
（金剛界大日如来）

胎藏界 外縛五銖印 満足一切智々明々

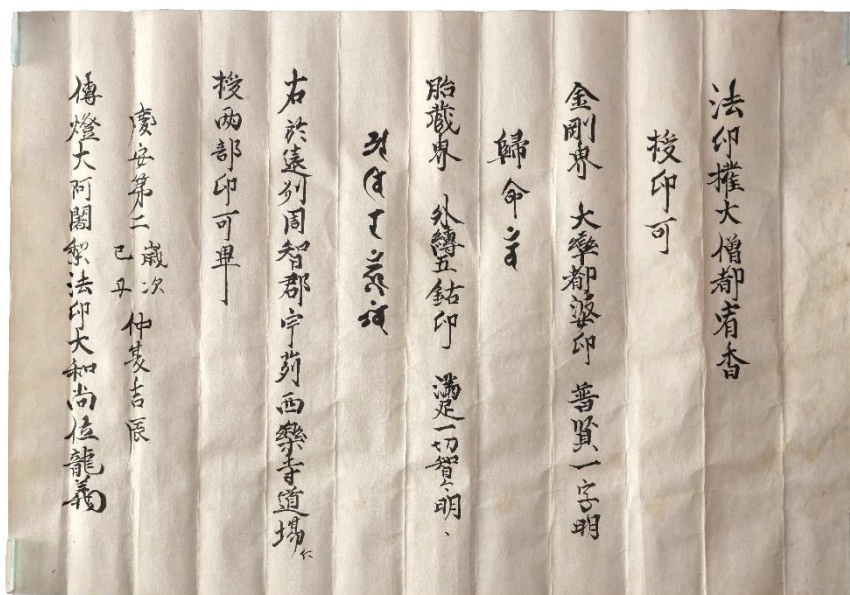
（ア）（ビ）（ウ）（ウン）（ケン）

右於三遠州周智郡宇苅西楽寺道場一

授二両部印可一畢。

慶安第二（六四九）己丑仲夏吉辰

伝灯大阿闍梨法印大和尚位龍義



〔宥香印信〕（西楽寺文書近世 735）

宥香は、西楽寺の道場で、西楽寺四世住職龍義から印可されています。

ちなみに、この印信、独特な美しい文字で認められています。これは数少ない西楽寺四世住職龍義の筆跡です。龍義の筆跡は、現在は油山寺に勧請されている袖切薬師（もとは宇刈三沢）にも残されています。数少ないながら、重要な筆跡です。

宥香が西楽寺住職になった時期はよく分かりませんが、『当山諸由緒扣』所引万治元年（一六五八）閏十二月「十所権現鐘銘」には「時代奥州岩城御宝殿

之生 学頭住 法印権大僧都有香」とあり、これ以前に西楽寺住職となっていたことが分かります。

また、「十所権現鐘銘」から、彼が奥州岩城御宝殿（現福島県いわき市錦町御宝殿）の生まれだということも分かります。

森町の山名神社獅子頭（優填獅子）には有香の墨書があり、そこから有香の生年が分かります（山名神社獅子頭については北島恵介氏の御教示による）。墨書は獅子頭内部の様々な位置にあり、正しい順番の読み方がよく分からないため、収録されている『森町史 資料編5 舞楽・民俗芸能・民俗資料』のページ順に読んで引用します。左の引用文は森町史の翻刻からではなく、実測図から読んだものです。

「山名神社獅子頭（優填獅子）」内側墨書

①台座内側墨書

延宝五天^{（一六七七）}霜月十六日

「法」 「有香七十一歳」

「村天王獅子」

「村中繫昌処」

（参考文献②七七八頁）

②内側面墨書

「七十一

歳

之」

③内上部墨書

延宝五天^{（一六七七）}／霜月十六日

飯田村天王／獅子

「法印有香」

④内底面墨書

「天王之獅子」

⑤上面

「守護」

「□参寄進飯田村牛頭天王獅子村中繫昌／諸

村 息災 祈所」

（参考文献②七八〇頁）

なお、北島氏は③の「法印有香」を、当時「有智」（あるいは「有知」と読んでいたのですが、私が西楽寺展で有香を紹介したことを知り、もしか、と声をかけてくださったそうです。

獅子頭墨書によれば、獅子頭は、延宝五年（一六七七）十一月十六日に、当時七十一歳（数え／満だと七十歳）の有香が寄進したものとことです。とすれば、有香の生年は慶長十二年（一六〇七）です。

さて、有香は、高平山遍照寺を整備した人物です。

彼が高平山に隠居した時期は、『当山諸由緒扣』（西楽寺文書近世一一）所引宝永六年（一七〇九）「乍恐以口上書ヲ以御訴訟申上候」注に記されている。

（前略）

一有香法印高平^{（一六七三）}（隠居延宝元^{（一六八四）}寅年

有香法印遷化貞享元^{（一六八四）}子年

（後略）

『当山諸由緒扣』は、収録した文書の前後に関連する注をつける体裁をとっています。

この記述によると、有香は延宝元年（一六七三）に高平山に隠居し、貞享元年（一六八四）に亡くなっています。

年月日不明、尊昭筆（高平山縁起下書）（西楽寺文書近世二三）に「上人遷化之寛永二十年壬午後、数

十年を経て西楽寺之住有香法印遍照寺に閑居し」とあることから考えると、龍義は高平山遍照寺の寄進を受けた後、高平山をずっと放置していたようです。では、有香はどのように高平山を整備したのでしょうか。

享保四年（一七一九）十二月、尊昭筆「御尋之趣書付を以申上候」（西楽寺文書近世一〇六二）によると、有香は高平山に大師堂と隠寮（隠居所）を建てています。大師堂は修復でしょうか。

（前略）

一、四拾七年已前延宝元年丑年西楽寺四代以前之住持有香高平山^{（一六七三）}隠居仕〇拾貳年存命之内、大師堂三間四面^{（一六八四）}葺営被^レ致候。貞享元年子^{（一七〇四）}極月廿三日ニ死去仕候。夫^{（一七〇四）}今年三拾六年、拙僧迄三代支配仕来候。則拾六年已前申^{（一七〇四）}年拙僧西楽寺江入院仕候節、四間式間半^{（一七〇四）}有香之隠寮御座候所、及^{（一七〇四）}大破ニ候故、取ほくし式間四方ニ普請仕候而、留主等指置申候。

（後略）

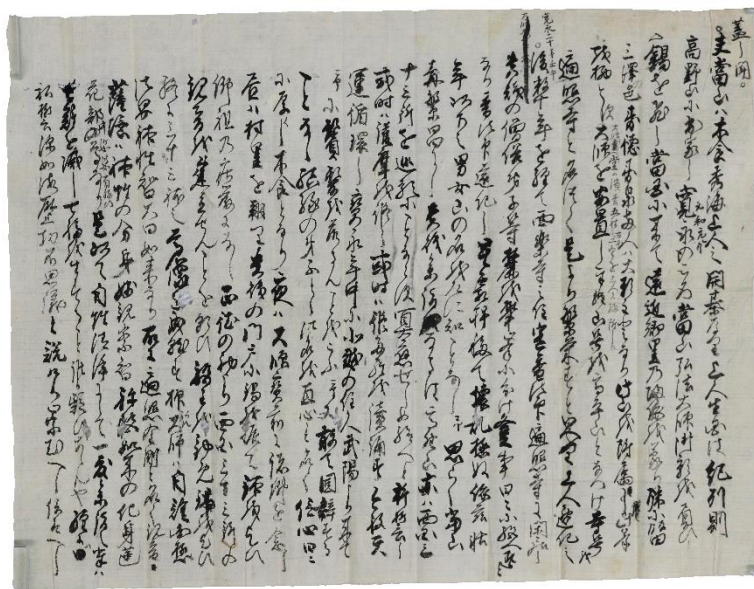
また、『当山諸由緒扣』（西楽寺文書近世一一）の後半部分、尊昭が作成したと見られる小さな竖帳（参考文献④参照）には以下のようにあります（～内双行書）。

（前略）

一同焰魔堂^{（一七一二）}又ハ骨堂^{（一七一二）}本堂^{（一七一二）}（当寺有香建立。正徳元年再興。願主木食直心。当院尊昭弟子。）

（後略）

文字組が難しいですが、焰魔堂（骨堂）、本堂は有香が建立したということのようです。



〔高平山縁起下書〕（西楽寺文書近世 23）



高平山聖観音（高平山最古の石仏か）

ており、彼の存命中には、貴賤の僧俗、弟子たちが連日参詣に来ていた、と言います。

このほか、高平山大仏の脇にある聖観音（右に写真）の碑文には以下のようにあり、有香が高平山で法華経供養をしていたことが分かります。

（聖観音）
（サ）
為紺紙紺泥華經一字一錢奉加衆菩提也

延宝七^{（二六七九）}年八月廿一日 法印有香

法華経は、女性の往生という文脈で注目されてきた經典です。また、西国三十三所は観音の巡礼で、観音信仰は女性の信仰と関わるものです。

有香没後、尊昭とその弟子の木食直心は、有香の頃には実現していなかったらしい、西国三十三所の観音巡礼を高平山に実現しました。

尊昭は、有香の路線を踏襲した、と書き残していますが、有香の頃に実際どうだったのか、ということとは、有香自身の記録が少なく、よく分かりません。

そのような中で、右の聖観音の碑文は、有香の頃から、女性を対象とした活動をしていたことを想定

させるものであり、重要です。

有香は、隠居後も、高平山の隠居として、地域のもめ事の仲裁などをしていらしたことが、西楽寺文書にいくつか残されています（『当山諸由緒扣』所引西三月九日付け文書など）。

享保三年（一七一八）二月十七日『高平山大仏建立施主附写』（西楽寺文書近世三一八）には以下のような記述があります。

（前略）

一、式分 谷川村中

一、壹分 同村為三有香

（後略）

有香のために、と大仏建立の寄付をした人がいます。同史料では、この他にも、細谷村の万五郎という人物が、「為三有香法印」として二分を寄付しています。有香は地域に親しまれた人物だったようです。

【参考文献】

① 櫛田良洪『真言密教成立過程の研究』（山喜房佛書林、一九六四年）。

② 森町史編さん委員会編『森町史 資料編5 舞楽・民俗芸能・民俗資料』（森町、一九九六年）。

③ 朴澤直秀『近世の仏教』（『岩波講座 日本歴史 第11巻 近世2』岩波書店、二〇一四年）。

④ 杉山侑暉「江戸時代における災害復興と災害情報伝達——北原川村（現袋井市国本）と西楽寺（袋井市春岡）の元禄地震・宝永地震——」（『静岡県博物館協会研究紀要』第四八号、二〇二五年）。

また、先に見た「高平山縁起下書」（西楽寺文書近世二三）には以下のようにありました。

（前略）上人遷化之寛永二十年壬午後、数十年を経て西楽寺之住有香法印遍照寺に閑居し、貴賤の僧俗・弟子等麓を峯ヶ峯に分け、登事日とに絶へすとなり、香法印遠紀之星霜捍移て壊乱極ぬ。依^{（尊昭）}茲壯年以下之男女山の名をたに知ことなし。予思らく当山^{（尊昭）}繁昌にし、貴賤参詣■なるは、高野山亦ハ西国三十三所を巡願にことならず、（後略）

尊昭の分析によると、有香は高平山遍照寺を、高野山や西国三十三所の巡礼のように整備しようとし

木食直心という人物

高平山の整備には、西樂寺八葉尊昭と、その弟子木食直心が大きな役割を果たしました。

木食直心は、高平山大仏建立の施主を勤めた木食（十穀を断つて、木の実・草の実だけを食すという難行＝木食行を行う人）です。

高平山大仏蓮弁銘文には、大仏の施主木食直心について、以下のように書かれています。

奉_レ建_二立丈六大日如来_一大願主

安養山西樂寺八葉法印尊昭弟子

当山 木食直心



蓮弁銘文 木食直心

木食直心は、西樂寺八世住職尊昭の弟子だと言えます。ちなみに、直心は高平山遍照寺の住職ではなく、あくまで大師堂の堂守です。遍照寺住職は西樂寺住職が兼帯することになっていて、高平山大仏蓮弁銘文にも「遠州山名郡飯田村／高平山遍照寺兼帯之住／西樂密寺法印尊昭大和尚」とあります。

木食直心の経歴については、「高平山縁起下書」（西樂寺文書近世二三）に以下のような記述があります。

（前略）上人遷化之寛永二十年壬午後、数十年を経て西樂寺之住有香法印遍照寺に閑居し、貴賤の僧俗・弟子等麓を峯に分け、登事日に絶へずとなり、香法印遠紀之星霜捍移て壊乱極ぬ。依_レ茲壯年以下之男女山の名をたに知ことなし。^{（尊昭以下同）}思_レらく当山□繁昌にし、貴賤参詣■なるは、高野山亦ハ西国三十三所を巡願にことならず、冥応せしめ給へと許誓之、或時ハ護摩を修し、或時ハ修多羅を誦誦す。今般天運循環し、宝永年中に北越の住人武陽より来て、予に鬢髪を落さんことをこふ。予又敢て固辞することなし。結縁の弟子とし、法名を直心と名く。信心日々に厚くし、木食となり、夜ハ大師宝前に諸仏を念し、昼ハ村里を翔り。貴賤の門戸に錫を振て鉢を乞ひ、仏祖の莊嚴になし、正徳の初より西国三十三所の観音を建立せんことを願ひ、□主を勤め鉢を乞ひ、終に三十三鉢之尊像を成就す。（後略）

尊昭は、有香の頃の高平山の賑わいを取り戻したい、と考えていました。そんな時、宝永年中に、武陽（江戸）から北越出身の人物がやってきて、尊昭に「剃髪してほしい」と願ってきました。尊昭はその人物を弟子にし、直心と名付けたと言います。直心は後に木食となり、正徳の頃から西国三十三所の観音建立に着手し、成就させました。

享保四年（一七一九）十月付け、尊昭筆「直心訴訟一件写断簡」（西樂寺文書近世一二）第二断簡には、

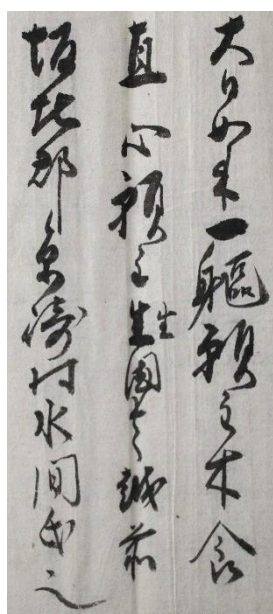
直心と尊昭のことがもう少し詳しく書かれています。

（前欠）

□□□□高平山江隱居被_レ致候。有香遷化以後拙僧迄三代致_二兼帯一支配仕来候_一。^{（尊昭）}拾五年以前高平山之雑木大小式百本余御座候処、拙僧寺中并且那相談之上式拾両余ニ売払、西樂寺讓借金利足付_二而三拾両余御座候_一、右之金子返済之加へ_二仕其利米を以て高平山修覆、留守居雑用等_二可_レ仕_一る留守居見立候内、直心俗体之節当地方身上相潰_レ、貧敷体_二而罷越_一、剃髪仕度由再三相願候付、同国之儀故不便_二成_一、諸縁之弟子ニ仕、高平山大師堂守に指置申候。則領主松平駿河守様^{（江右）}之趣拙僧方一札指上、人別帳ニも御記し被_レ成候。（後略）

身上をつぶし、貧しげな様子でやってきた人物は、尊昭に剃髪を求めてきました。尊昭は同郷のよしみで不憫に思い、彼を弟子にし、高平山大師堂の堂守にしました。それが直心です。

直心と尊昭は同郷で、北越の出身。享保三年（一七一八）三月八日付け「高平山半鐘銘」（西樂寺文書近世一七四一）に直心の経歴が書かれていて、直心



〔高平山半鐘銘〕部分

と尊昭の出身地が分かります。

駿遠両国鑄物師惣大工森町住山田七郎左衛門尉
藤原種満、遠州飯田村高平光平山遍照院常什物・
観音三拾三昧・大日如来一軀、願主木食直心。

願主生国者越前坂比郡糸崎村、水間氏也。享保
三年^(一七六八)戊戌三月八日。

当山開山木食秀海上人寄附半鐘者、寛永九年甲
卯月、大工藤原朝臣権太夫所^(一六三二)造也。早晚及三破
損、今新倍^(一六三二)彼鑄立之者也。

西樂寺八葉法印尊昭代

(後略)

直心は越前国坂井郡糸崎村の出身で、俗名は水間
氏というそうです。

糸崎村は、今の福井県福井市糸崎町かと思えます。
尊昭は直心と同郷ですから、尊昭も越前の生まれ
なのでしょう。村まで同じかは分かりません。越前
出身の二人が、江戸を経由して袋井で会う、という
ことは、とても低い確率だと考えられますから、も
しかしたら、二人は故郷で面識があり、直心は尊昭
を頼ってやってきたのかもしれない。

ところで、直心が西樂寺にやってきた時期ですが、
右の〔直心訴訟一件写断簡〕を見ると、宝永二年（一
七〇五）のこのように見えますが、宝永六年（一
七〇九）十一月付け「高平山之様子」（西樂寺文書近
世一〇一二）を見ると以下のようにあり、宝永元年
（一七〇四）ではないか、とも考えられます。

(前略)

一同廿三日^(一七〇九年九月)年番岸之坊方三沢惣太夫方へ遣様
ハ、深谷山境ハ取分谷之内ニ置之由聞伝候ニ付、

六年以前申年松木之節方木食被^レ在候。松五
本七つ置^ニ御用木として切取事不^レ得^ニ其意^一
候段申遣^ス。其節之返事ニ、四人之者共呼寄様^子
承^ニ而御返事可^ニ申出^一由申来^ル。

(後略)

江戸時代はゼロがない「数え」の数え方ですから、
「六年以前」は満五年前、宝永元年となります。そ
の干支は甲申で、こちらも合っています。

宝永元年に木を切った頃から木食が住んでいた、
とのこと。この木食が誰かは書かれていません
が、直心以外の木食が見当たらないので、これは直
心ではないでしょうか。

高平山大仏建立後、尊昭と直心の間にはトラブル
があり、最終的に、直心は追放されてしまします。
尊昭と直心との関係が修復不可能になってから書か
れた〔直心訴訟一件写断簡〕（西樂寺文書近世一二）
第二断簡には以下の記述があります。

(前略)

一、西国三拾三所観音并鑄仏大日、直心願主と
して諸人を勧め建立仕置候。

(後略)

訴訟の中でも、尊昭は、西国三十三所の観音建立
と高平山大仏建立は直心の功績だ、と書いています。
『当山諸由緒扣』（西樂寺文書近世一二）尊昭直筆
ノートには、西国三十三所の観音建立が正徳三年（一
七一三）に成ったと記されています（へ内双行書）。

(前略)

一高平山遍照寺大師堂^{開山木食上人}
西国三十三所観音願主木食直心正徳三癸巳^(一七一三)

〔工匠角左衛門／二月点眼畢〕

(後略)

この後ろに、前に引用した焰魔堂云々の記事があ
ります。焰魔堂は、時期的に、宝永地震からの復興
作業です。また、西国三十三所の観音建立に関わっ
た工匠角左衛門ですが、『当山諸由緒扣』に載る、宝
永六年（一七〇九）に楼門を再建した際の大工、鈴
木角左衛門と同一人物でしょう。

このほか、前掲の「高平山半鐘銘」（西樂寺文書
近世一七四一）によれば、寛永九年（一六三二）に
木食秀海が高平山に寄進した半鐘を、木食直心が享
保三年（一七一八）修復したと言います。〔直
心訴訟一件写断簡〕（西樂寺文書近世一二）第二断
簡にも、高平山半鐘修復の経緯が記されています。

(前略)

一、高平山^{宝永元年}秀海上人寄進之中鐘御座候を、拾六
年以前拙寺^{江四}引取、御祈祷之衆会半鐘に用
置候所、損^レ茂御座候ニ付、直心鑄仏建立之
節、下承に仕度由願申候付指遣申候。鑄仏
勸化金之余慶茂御座候故、古来之鐘に倍^レ
之鑄立、高平山大師堂ニ鈎置申候。

(後略)

宝永元年（一七〇四）に、高平山半鐘を西樂寺に
引き取って、祈祷の半鐘に使っていたが、壊してし
まったので、高平山大仏の寄進の余慶で、倍の大き
さに鑄直し、高平山の大師堂に懸けたそうです。

なお、この半鐘は、アジア・太平洋戦争で供出さ
れ、現存していないようです。

高平山大仏と江戸城での儀礼

西楽寺八世住職尊昭は、同郷の弟子である木食直心とともに、寄付を募り、高平山遍照寺に大仏を建立しました。

当時の史料に出てくる名称から、私は高平山の大仏を「高平山大仏」と呼んでいます。

大仏建立は享保三年（一七一八）に建立されました。この、大仏建立の時期に注目してみましよう。

少し話が飛ぶようですが、江戸時代の西楽寺が出席した、江戸城での儀礼について触れておきます。

江戸時代、西楽寺は、五年に一回、正月に参府（江戸に行くこと）して、江戸城で年頭の挨拶に参加していました。このような江戸城内での儀礼を、学術

用語で「殿中儀礼」などと呼びますが、西楽寺文書では、「登城御礼」と書かれています。

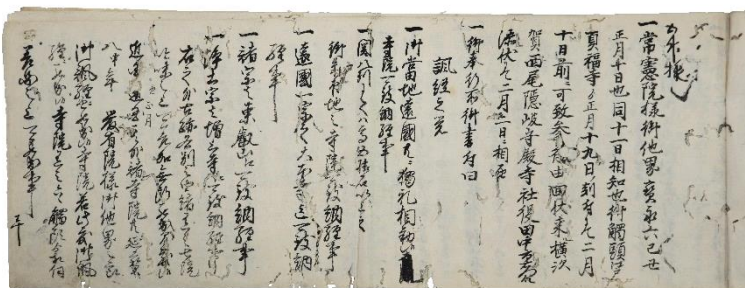
江戸城での儀礼には寺社の格が反映され、「内独礼」（本山が出席）↓「惣独礼」↓「惣礼」（朱印地五十石以上）↓「惣礼」（朱印地五十石以下）の順で、挨拶も格式が序列化されています（参考文献⑤）。

あと、何年に一度挨拶に行くか、ということも序列が決まっています。大変細かいのですが、西楽寺文書を調べてみたところ、西楽寺は、一般的な基準どおり、朱印地五十石以上のお寺の格式で登城御礼に出席していました（西楽寺の朱印地は一七〇石）。

こうした幕府の様々な儀礼は、四代家綱期以降整備が進められ、八代吉宗の頃までに完成したと言えます（参考文献②）。

高平山大仏（青銅製胎蔵大日如来坐像）

西楽寺には、定期的に行われていた年頭御礼だけでなく、将軍が代替わった時の儀礼（代替御礼）に関する史料も残されています。将軍の代替わり儀礼には、①前将軍の葬送、②御代替御礼、③将軍宣下という三つの要素があります（参考文献③）が、お寺が関わるのは、①前将軍の葬送です。西楽寺文書には、五代綱



『御代替書付』（西楽寺文書近世 887）徳川綱吉の葬儀

吉の葬儀（宝永六年（一七〇九）付け『御代替書付』西楽寺文書近世八八七）、六代家宣、七代家継の葬儀（『有章院様御他界』西楽寺文書近世一六五八、『御諷経并御継目御礼留帳』西楽寺文書近世一七五五）に関わる史料があります。

いずれも尊昭が記したものです。中でも珍しす。中でも珍しい史料が、五代将軍綱吉の葬儀を記す『御代替書付』（西楽寺文書近世八八七）です。

江戸幕府の儀礼が整備され出したのは、四代家綱期からですから、綱吉のころの幕府の儀礼は、かなり初期のものです。

また、綱吉・家宣・家継の葬儀に関わる史料が地方の寺院に残っている例もかなり少ないように思います。現存している中では、全国的にもかなり古い将軍の葬儀に関する史料なのではないでしょうか。

『御代替書付』を読むと、新義真言宗組織のとり

まとめを担当していた触頭からもらった席次図の写しや装束、人の動きなどが詳しく載っています。

また、「將軍宣下五月朔日ニ相済。同三日ニ御祝儀御能。公家衆江御馳走なり。町人も白須にて見物被ニ仰付ニ候」とあり、五月一日に將軍宣下をした後、三日にご祝儀で公家衆にごちそうをしたことや、町人にも見物が許されたことが記されています。

尊昭が、宝永六年（一七〇九）の五代將軍綱吉葬儀、正徳二年（一七一二）の六代將軍徳川家宣に参列していることを考えると、大仏建立の時期が、重要な意味を持ってきます。

高平山大仏の建立には、宝永四年十月四日（太陽暦一七〇七年十月二十八日）の宝永地震が影響していると思いますが、それ以外にも、高平山大仏建立に影響を与えたと見られる歴史的事件があります。

元禄く宝永の東大寺大仏復興です。

元禄十年（一五六七）に兵火によって消失した東大寺大仏と大仏殿は、東大寺の公慶とその後継者たちの尽力により、元禄五年（一六九二）に大仏再興、宝永六年（一七〇九）に大仏殿再興が成りました（参考文献①④⑥）。

なお、中門や廻廊が完成するには、この後まだ三十年ほどを要したとのことでした。

東大寺大仏再建事業は、高平山大仏建立事業と、かなり近い時期に行われています。

東大寺大仏については、元禄十四年（一七〇一）に、全国的に、年貢のように資金（奉加金）を集める仕組みになりました。

西山厚氏は、この全国的な奉加金について、金額

がわずかであり、全国的な集金の後に、大仏の参詣者が増加したことから、この集金が、大仏の知名度を上げたのでは、と指摘しています（参考文献④）。

また、平岡昇修氏は、ツーリズム、地域振興の視点で、江戸時代の東大寺大仏復興を分析しています（参考文献⑥）。

東大寺大仏再建事業は、江戸などでも活動を展開していました。

尊昭が江戸に行く機会は、綱吉の葬儀以前からあり、全国的な奉加金でもいくらか情報を知っていたことと思いますが、江戸で、より詳しく東大寺大仏再建事業に触れることがあったと思います。

東大寺大仏殿再建には、新義真言宗の知足院（隆光が、というべきでしょうか）も関わっています。

その縁で、西楽寺に東大寺大仏復興に関する様々な話が伝わっていてもおかしくはないと思います。

そして何より、尊昭が参列した將軍の葬儀は、全国から主だった寺院の関係者がやってきます。そこで、様々な情報がやりとりされていたことは想像に難くありません。

家宣葬儀のときには、まだ東大寺全体の再建は終了しておらず、大仏、大仏殿のひとまずの完成を見た時点での、未だ継続中の寄付、再建活動について情報を得る機会となったと思います。

一七〇〇年前後には、東大寺大仏復興の知名度が上がり、一種の大仏ブームが起こっていました。

この時に起こった一種の大仏ブームの潮流が、尊昭にひらめきをもたらした可能性は高いと思います。とすれば、高平山大仏の建立は、江戸を重要な交

流の場として、東大寺大仏再建事業を参考に構想されたもの、と考えて良いのではないのでしょうか。

そして、將軍の葬儀などの殿中儀礼の場合こそが、数多くの寺院が情報交換できる場だったのではないかと、私は考えています。

【参考文献】

①平岡定海『日本寺院史の研究 中世・近世編』（吉川弘文館、一九八八年）。

②西沢淳男「神社の將軍代替御礼と殿中儀礼——高尾山薬王院を事例として——」（『日本歴史』五八八、一九九七年）。

③岩橋清美「將軍代替り儀礼の社会的意義——第13代將軍徳川家定の代替り儀礼を事例として——」（『東京都江戸東京博物館研究報告』第8号、二〇〇二年）。

④西山厚「公慶上人の生涯」（GBS実行委員会編『ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集第四号 論集 近世の奈良・東大寺』東大寺発行／法蔵館制作・発売、二〇〇六年）。

⑤高嶋弘志「蝦夷三か寺の殿中儀礼と寺格について」（『釧路公立大学地域研究』18、二〇〇九年）。

⑥平岡昇修「奈良の復興は大仏再建から——江戸中期の奈良に脈をいをもたらしした「勸進」と「寄進」——」（『EURO-NARASIA Q』5、二〇一六年）。

高平山大仏殿——六角堂

高平山には大仏殿がありました。その形状について、一八四〇年頃の証言があります。

(前略)

高平山

弘法大師堂

下村西楽寺控

六角堂建^つ之^を。其内ニ一丈四尺余ノ大日如来ノ唐金ノ座像ノ尊体有り。三月廿一日、毎年御影供諸人群集ス。此山ニ遍照寺ト号ル寺号有^れ之共、

焼失ノ後、堂主居所而已。

(後略)

(参考文献①二〇二頁)

これは、森町の山中豊平という人物が、天保七年(一八三六)に亡くなる直前まで編纂を続けていた地誌『遠淡海地志』周智郡飯田村の記述です。高平山には六角堂があり、その中に一丈四尺(約四・二メートル)の唐金(青銅)製の大日如来坐像があった、とのこと。

山中豊平の記録は、

大仏殿は六角堂だったという貴重な証言ですが、読めば分かるように、何らかの事情で遍照寺が焼失した後に書かれた記録であり、これだけでは証言として少々弱いものです。

ですが、西楽寺文書中に、年月日不明ながらも「高平六角堂図」と書かれた六角堂の図面(西楽寺文書近世三一八七)が残されていたことで、高平山に六角堂があったことが確実となりました。

少なくとも、十九世紀の高平山大仏殿が六角堂だったことは、ほぼ確実でしょう(高平山大仏建立時の大仏殿の記録が見つければ良いのですが)。

その六角堂図ですが、三点の図面があり、相互の関係は不明です。以下に、一つ一つ見てみましょう。

年月日不明「高平六角堂図」は、俯瞰で見た六角堂図であり、紙背に「高平六角堂図」とあります。

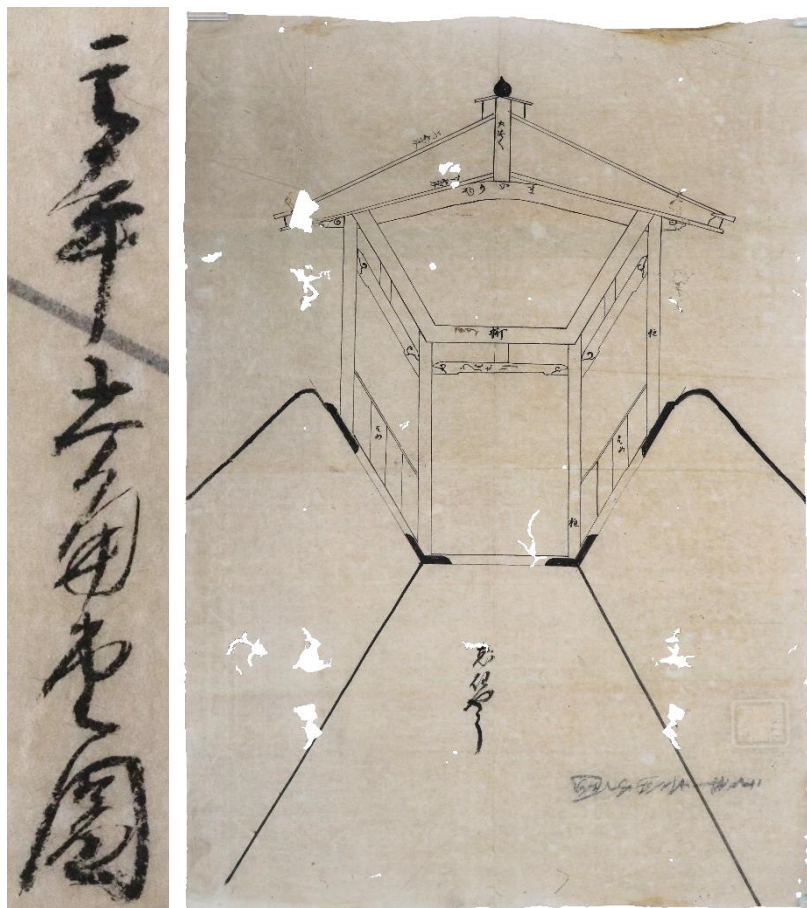
この史料により、高平山に六角堂があったことが確実となり、山中豊平の証言の価値が高まりました。

大仏殿が六角堂だったことで、高平山大仏について、より興味深いことが分かります。

大仏殿が六角形というのは、非常に珍しいことです。そもそも、六角堂自体が珍しいです。

六角堂は、日本では、聖徳太子Ⅱ如意輪観音Ⅱ六角堂という形で如意輪観音と結びつけられます(参考文献②)。例えば、西国三十三所の十八番札所、紫雲山頂法寺の本堂は六角堂で、本尊は如意輪観音。聖徳太子の開基と言います(参考文献③二八〇頁)。すなわち、高平山大仏には、大仏殿によって如意輪観音のイメージが重ね合わされているのです。そして、日本(中国以東)では、如意輪観音に、女性性のイメージが重ねられて信仰されています(参考文献②)。高平山大仏には、女性のイメージが重ね合わされているのです。

先に、宥香のころから、高平山遍照寺の整備は、女性を対象としていた可能性があると述べました。尊昭、直心のころの集金記録ではないかと思われる



「高平六角堂図」(西楽寺文書近世 3187 の内)

左は紙背墨書「高平六角堂図」

る『高平山西国三拾三所観音施主』（西楽寺文書近世三二八四）という帳簿は、高平山に西国三十三所を建立したときの勧進記録ですが、読んでみると、女性が多くお金を寄進していることが分かります。

高平山は、緻密に、様々な思想的イメージを重ね合わせることで、女性を対象とした仏教思想空間を構築したものなのかもしれません。六角堂も建立当時からだとすれば、尊昭は、自らの学識を傾け、この仏教思想空間を設計したことになるかと思えます。ちなみに、尊昭は、近世西楽寺の住職の中で、ほぼ唯一、自らの世代を「八葉」と自署しています。

尊昭の他に一人だけ、幕末の有盛も「葉」を使っています。有盛の場合、尊昭に憧れて自分も「葉」を使ったようなので、問題とせずとも良いでしょう。

「八葉尊昭」は「八葉尊」、すなわち、胎藏曼荼羅の中心「中台八葉院」であり、胎藏大日如来＝高平山大仏と尊昭自身を重ね合わせる名乗りです。

尊昭は、西楽寺八世住職であり、自分の名前が「尊」で始まるという偶然から、高平山の整備方針を思い付いたのかもしれませんが。

続いて、六角堂の平面図を見てみましょう。

見ての通り、日焼けや虫損が大きく、状態がかなり悪いです。

年月日などの情報がなく、調査者が原秩序の記録もしていないので、高平山大仏殿のものかは不明ですが、高平山大仏殿の他に六角堂が確認できないので、ひとまず高平山大仏殿と見て良いでしょう。

よく見ると、柱の断面も六角形になっています。

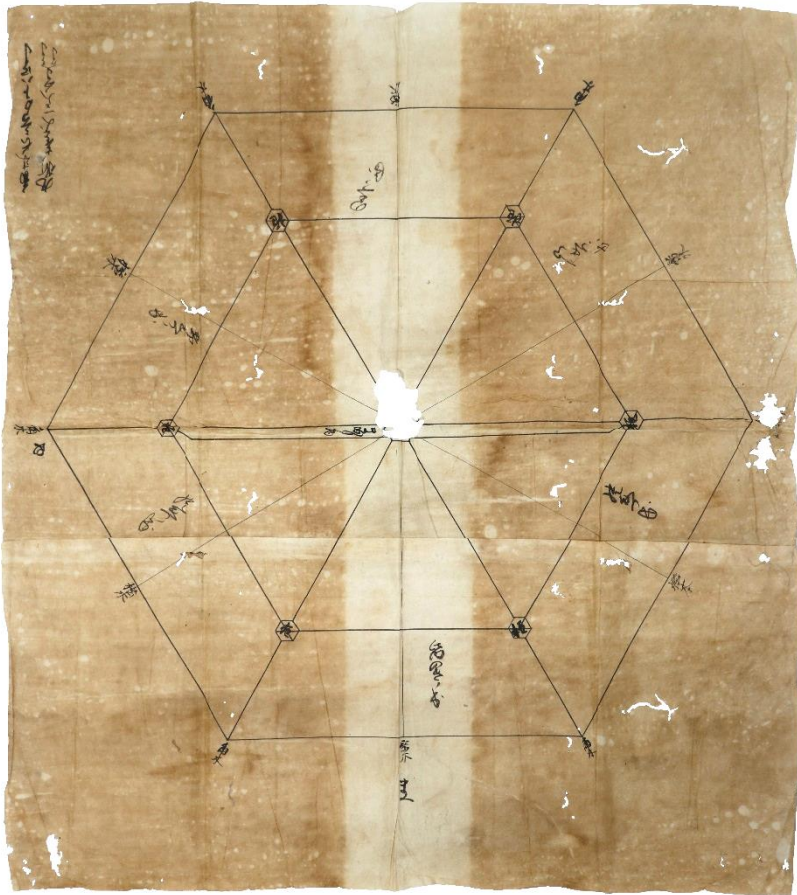
最後に、建物を前から見た図面を紹介します。この図は、五つの断簡に分かれていて、全体を並べると、建物の正面図だと分かります。この史料もまた関連情報が全くな

いので、写真で紹介する以上のことは分かりません。

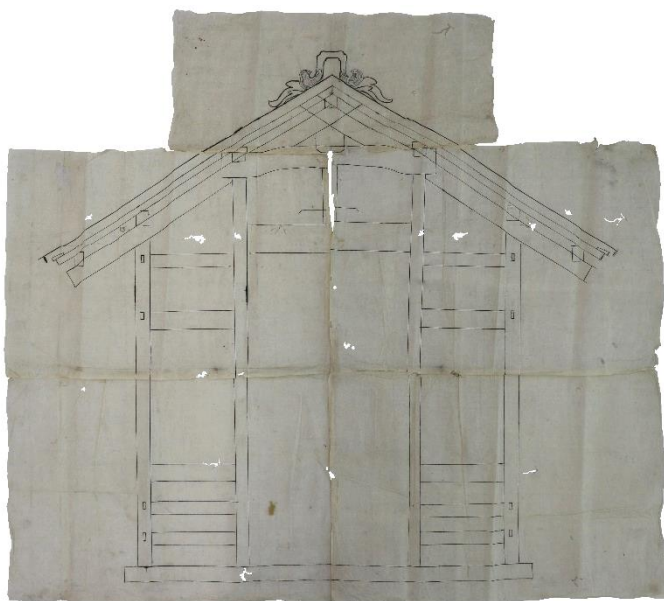
なお、写真では断簡を並べていますが、これは、糊付けなどはせず、ただ重ねて置き、撮影しただけです。状態を考えると、図面三点ともに、裏打ち、糊付け、しわのばしなどは危険だと思います。

【参考文献】

- ① 山中豊平編著・山中真喜雄編『遠淡海地志』（一九九一年）。
- ② 彌永信美「如意輪観音と女性性」『インド哲学仏教学研究』8、二〇〇一年。
- ③ 京都国立博物館、読売新聞社編集『西国三十三所 草創一三〇〇年記念 聖地をたずねて 西国三十三所の信仰と至宝』（読売新聞社、二〇二〇年）。



六角堂平面図（西楽寺文書近世 3187 の内）



建物を前から見た図（西楽寺文書近世 3187 の内）

高平山大仏と墓石の再利用



高平山大仏の階段、一番上の段の真ん中に、一つだけ違う雰囲気の花石があります（右写真参照）。

上から見てみると、「一」月廿五日／「一」居士

「一」之位」（内双行書）と書かれています。

つまり、この石は墓石です。

中近世には、お地藏様や墓石など、石材は頻繁に再利用されました。石材の再利用は洋の東西を問わないようです。

高平山大仏の石段に墓石が再利用されていることについて、私は、「なるほど、墓石なら最初から直方



上から見た石段。墓石再利用。

体に加工されているから合理的だ」と思います。

案外、そうした実務的な理由による再利用かもしれませんが、大仏など仏像に関わる建築資材に墓石を再利用することに、宗教的・思想的な意味（供養など）があるのかもしれませんが。

ただ、そうした研究が見当たらず、石材の再利用に関する思想的なことを記した史料も見つからないので、まだなんとも言えません。今後の課題ですね。

たかひらさんぽ 旅のしおり

杉山侑暉 著

袋井市歴史文化館

令和八年（二〇二六）二月十八日 初版

第八回西楽寺講座 たかひらさんぽ

令和八年三月二十一日開講（予備日三月二十二日）